

学部生を活用したライティング支援の現状と課題

—他大学ライティング支援施設との比較をとおして—

外山 敦子・増地 ひとみ
TOYAMA Atsuko, MASUJI Hitomi

1. はじめに

学生の「書く力」を育成するため、日本語ライティング¹⁾の支援施設を設置する大学が増加している。愛知淑徳大学初年次教育部門でも、学生の「書くこと」全般を支援する施設として2014年にライティングサポートデスク（以下「WSD」）を開設した²⁾。

日本の大学におけるライティング支援施設では、大学院生が支援者としてライティング支援を行う場合が多い。一方で、本学WSDでは学部生が支援者（チューター）を務めており、本学WSDの大きな特徴の一つとなっている³⁾。同様の取り組みを行う大学は全国的に見て未だ極めて少なく、学部生チューター活用と育成に関わるノウハウや成果を共有することは、本学にとっても他大学にとっても有益であると考えられる。そこで筆者らは、学部生をライティング支援に活用する大学を対象に、訪問調査を行った。

本稿では、複数の大学のライティング支援施設における実践を、特に学部生チューターの活用と育成方法を軸に、本学WSDと比較しつつ紹介する。そして、学部生チューターを活用したライティング支援の現状と課題、本学WSDにおける今後の展望を述べる。

2. 日本の大学におけるライティング支援

日本の大学におけるライティング支援は、早稲田大学で「ライティングセンター」が2004年に発足して⁴⁾以降、広がりを見せてきた。ライティング支援施設に関する先行研究も蓄積されてきている⁵⁾。

「ライティングセンター」あるいは「ライティングサポートデスク」等の名称を持ち、専用の独立したスペースを確保して支援を行う施設のほか、図書館の学習支援の一部としてライティング支援を行う大学も多数存在する。「ライティング支援施設」と一言と言っても、施設そのものの運営主体や運営方法、相談業務の実施方法（支援者、支援者の役割、支援対象者、支援対象の文章、支援の際に使用する言語など）は施設によって多種多様であり、それぞれの大学の事情に応じたありようとなっている。

先に述べたように、支援者であるチューターは大学院生が務めることが一般的である。そのような中、学部生

を活用する大学が登場しはじめた。2019年3月現在、本学を含め7大学が確認できている⁶⁾。まだ少ないものの、徐々にその数は増加しつつある。

3. 本学WSDにおける学部生採用の経緯

他大学との比較を行う前に、本学WSDにおける学部生採用の経緯を簡潔に記す。冒頭に述べたとおり、本学WSDは2014年に開設され、2014年度の年間相談件数は327件であった（前期145件、後期182件）。相談業務の担当者は、基幹科目「日本語表現 T1」を担当する教員と大学院生の計13人であった。

ところが2015年度に入り、利用者が激増した。相談件数は前期だけで853件（前年比6倍）に跳ね上がり、最も混雑した時期には100件以上の相談を断る⁷⁾惨事となった。そこで、以降のさらなる需要の高まりに備えるべく、相談に当たるスタッフの増員を図ることとなったが当てがえない。ここで苦肉の打開策として導入されたのが学部生チューターだったのである。以後、現在に至るまで、支援対象を一部の初年次科目（「日本語表現 T1」と「日本語表現 T2」）に限定した上で、学部生チューターが後輩の支援を行っている。2018年度は24人が在籍していた⁸⁾。

4. 他大学ライティング支援施設の訪問調査

4-1. 目的

訪問調査は、ライティングの支援に学部生を活用している大学を対象に実施した。学部生チューター活用の現状や育成方法に関して聞き取りを行い、実際の支援の様子を見学することが目的である。以下にその内容を報告する（訪問順）。

4-2. 信州大学「ピアサポ@Lib」

■訪問日：2018年10月30日（火）

■回答者：加藤善子氏（高等教育研究センター准教授）、武田佳代氏（中央図書館 図書館サービスグループ主査）、後閑壮登氏（医学部図書館／前・中央図書館 図書館サービスグループ）

■チューターの人数と属性：7人（学部生）

■学部生採用の経緯:開始当初、大学院生をチューター⁹⁾に雇用したが、学びの基本を教えることへの抵抗から、10人中9人が1年未満で退職。2年目より、大学初年次生への親和性の高い学部上級生に切り替え、現在に至る¹⁰⁾。

■学部生の活用:松本キャンパスで開講する1年生対象共通教育科目「大学生基礎力ゼミ」(2018年度受講生267人/以下「ゼミ」と称す)と連携し、課題レポートの作成を指導する。前年度のゼミ受講生のうち、担当教員の推薦を受けた優秀な学生をチューターとして採用する。受講経験のある先輩学生が後輩の受講生を指導するピアサポート形式。

■チューター育成方法:ゼミ担当教員が、指導員研修も担う。4月～5月中旬は毎週金曜16:30～18:30、それ以降は2週間に1回の頻度で継続する。研修内容は、①授業課題の理解、②利用者への応対の基本(傾聴や注意の仕方)、③ライティング支援の理念(紙を直すのではなく書き手を育てる)、④授業担当者との顔合わせ、⑤ロールプレイング、など。

■本学との違い・特徴:特定の科目のレポート課題とセットにして個別ライティング支援を提供している点が、最大の特徴である。課外の学習支援を自主的に利用するという行動そのものを評価し、当該科目の加点対象とする。その結果、大半の受講生がライティング支援を受けている。指導回数とレポートの評価にも相関関係がみられるとのことである。また、支援する側も、初年次生の「ロールモデル」として尽力し、大半が卒業まで勤めあげるほどやりがいをもって指導にあたっている。

こうした成果を支えているのは、徹底したチューター研修にある。毎週(ないしは2週間に一度)2時間の研修に全員が集まるのは、スケジュールに制約の多い学部生にとっては至難の業であるはずだが、信州大学ではそれを年間通して行っている。やむを得ず参加できなかったチューターには、他のチューターが自主研修に付き合っただけフォローすることもある。本学では、原則として研修を通常業務のなかに位置づけているので、チューターが一堂に会する業務時間外研修が年2回しかなく、しかも全員参集できたためしがない。信州大学では、この研修への参加が初めから採用条件の1つになっており、本学よりも徹底している。

4.3. 共愛学園前橋国際大学「ラピタデスク」

■訪問日:2018年12月7日(金)

■回答者:後藤さゆり氏(副学長)、堀田誠氏(学長特別補佐)

■チューターの人数と属性:18人(学部生)

■学部生採用の経緯:大学院が設置されていないため、学部生を採用する以外の方法がなかった。

■学部生の活用(学部生が支援する内容):初年次の基

礎演習(5つのコースで開講。前期・後期とも必修科目)の課題レポートが主な支援対象。コースごとにレポートのテーマは異なる。チューター自身が所属していないコースのレポートも支援する。その他、持ち込まれる全ての相談に応じる。

■チューター育成方法:①チューター全員参加での研修を年5回実施する。5回ともに教員が立ち会うが、教員が関与するのは1回目(新人研修と、1年間の振り返り・まとめを行う回)のみである。2～5回目は図書館所属の学習支援員の指示のもと、学生が中心となって研修を進める。②通常勤務期間は、先輩チューターのセッション見学や、先輩チューターとのロールプレイにより実践に近い研修を積む。③初年次生に課されるレポートのテーマについては、Excelの表にして共有し、各チューターが自習する。研修は原則、マニュアルを読んだ後の自主研修である。

■本学との違い・特徴:共愛学園前橋国際大学では、「ラピタデスク 前国生による前国生への学修支援プログラム」の旗印どおり、学部生主体の運営を目指し、実行もしている点が特徴である。特に、チューター全員参加での研修が学生中心で行われている点、マニュアルを読んだ後の自主研修が原則とされている点、学部生が支援する文章を制限していない点は、本学と大きく異なっている。さらに、半学期間の活動をまとめた学内向けの「利用状況報告書」までも学生が作成するという点であり、これも本学との相違点である。

4.4. 大分大学「ライティング・サポート・デスク」

■訪問日:2019年1月30日(水)

■回答者:佐藤浩彰氏(研究・社会連携部学術情報課図書企画係長)

■チューターの人数と属性:6人(院生2人、学部生4人)

■学部生採用の経緯:大学院生の数があまり多くない上、社会人学生が多く、昼間の時間帯は勤務できないため。

■学部生の活用(学部生が支援する内容):学部生(主に1・2年次生)が持ち込む、授業・演習・実験等のレポート作成に関する相談に対応する。例えば、テーマの決め方、文献検索の仕方、文章構成などである。卒業論文はターゲットにはしていないものの、持ち込まれれば対応するとのことである。ライティングにこだわらず、何にでも対応している(就職活動や留学についての相談・話し相手になるなど)。

■チューター育成方法:採用面接の時に、職員より業務内容や禁止行為を説明する。別途、教員が「情報検索」「引用、参考文献の書き方」の講習会を行う。その他の特別な研修は行っていない。

■本学との違い・特徴:大分大学では、チューターが利用促進のために行っている活動が特徴的である。利用者が施設に来るのをただ待つのではなく、チューターの側か

ら出向いていく。すなわち、図書館内で自学自習している学生に声をかけて「御用聞き」「客引き」をするのだという。デスクの認知度が低く、利用者数が少ないために始めた取り組みであるそうだが、2017年度前期はこの活動による利用者が7割を占めた。チューターに話を聞いたところ、この活動から学びを得ているとのことであった。こうしたチューター側からニーズを掘り起こす活動は、本学では行っていない。また、大分大学でも学部生が支援する文章に原則的に制限を設けていない。研修の内容も本学と異なりシンプルである¹¹⁾。支援の内容にしる研修にしる、チューターに信頼を置いて任せており、それがチューターの学びと成長につながっている様子であった。

4-5. 追手門学院大学「ライティングセンター」

■訪問日：2019年2月25日（月）

■回答者：梅村修氏（基盤教育機構長・ライティングセンター長／教授）、東田充司氏（基盤教育機構副機構長／教授）

■チューターの人数と属性：教員12人、大学院生2人、学部生24人

■学部生採用の経緯：当センターは2017年4月に開設し、今回訪問調査した大学のなかでは最も新しい施設である。現在は12人の所員（教員）が個別指導の多くを担っているが、所員はそれぞれに学内で重責を担っており、ライティング指導だけに十分な時間を割くことはできない。そこで学部生・院生から自薦・他薦問わずチューターを募り、彼らが直接利用者の個別指導にあたり、教員は学生チューターの育成・指導などの後方支援に回る態勢を整えつつある。

■チューター育成方法：2段階の研修がある。チューターを目指す学生は、まず1クール4回の研修を受ける。研修の修了生には「認定証」が授与され、「学生チュータートレーニー」となる。「トレーニー」には、所員の先生の個別指導を観察することを課す。半年から1年間、現場でチュータリングの技術を体験的に学ぶ。こうして独り立ちした学生を「学生チューター シニア」と呼ぶ。これ以降「シニア」は個別指導を1人で担当する。

■学部生の活用：すでに30件以上のチュータリングを経験した「シニア」の院生もいるが、学部生はまだ大半が研修中とのことだ。だが、ライティング指導の第一線に学部生チューターが立ち、センター運営の主力を担うようになる日は、目前まで迫っている。

■本学との違い・特徴：特筆すべきは、センターに属する教員の多さとその顔ぶれである。12人の所員全員が追手門学院大学の専任教員で、なおかつその大半が長年日本語指導や「書くこと」を仕事にしてきた専門家である。これだけでも全国で類を見ないといえるが、追手門学院大学の強みはそれだけではない。多忙な先生たちが

ライティング個別指導の最前線に立ち、スタッフが一堂に会する全体研修では学生に混じって同じメニューをこなす。追手門学院大学の学生チューターは、そうした所員の先生から、チュータリングのノウハウやマインドを直接学び得ている。当センターのライティング支援は、利用学生の満足度や学内教員からの評価も高いとのことだが、それは上述のように教員と学生が一体となった取り組みが功を奏しているからであろう。

5. 学部生活用の現状—メリットとデメリット—

今回調査した4大学のライティング支援施設を「学部生チューターが担う支援の範囲（文章の種類）」と「学部生チューターの研修の進め方」の観点から図1のように4つに区分して特徴を確認する。

Aの категорияには共愛学園前橋国際大学と大分大学、Bには追手門学院大学、Dには信州大学がそれぞれ当てはまる。Cに相当する施設は、今回訪問した大学にはなかつ

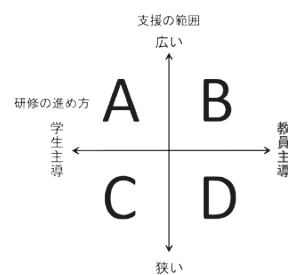


図1 学部生チューターによるライティング支援の分類

た。ちなみに、本学は支援の範囲は限定的で、研修は教員主導で行っているため、信州大学と同じDに属する。わずか2つの観点による分類だが、これだけでも学部生の活用と育成に考え方の違いが見えてくる。

このように運営の方法は様々だが、一方で学部生チューターを起用するメリットとデメリットは、各大学の回答がほぼ一致した。表1は、これらの要点を「利用者にとって」、「チューターにとって」、「施設にとって」に分けて整理したものである。

表1 学部生活用のメリットとデメリット

メリット		デメリット
利用者への共感能力が高い	利用者にとって	指摘が不十分になりがち
社会人基礎力の向上 自己肯定感を高められる	チューターにとって	なし
学生目線の組織運営	施設にとって	研修の難しさ 時間の制約、担当者の確保

利用者として施設にとってチューターが学部生であることの最大のメリットは、利用者との近しさにある。「親しみがわいて利用者が相談しやすい」（大分大学）、「利用者目線の運営改善ができる」（共愛学園前橋国際大学）などが挙げられた。さらに各大学がこぞって挙げたのは、チューター自身の成長である。「文章の書き方への理解を深められる」、「多様な考え方に触れることができる」（以上、信州大学）、「相手のニーズを引き出し、提案する力がつく」（大分大学）

などは、チューターの職務が社会人基礎力の向上に資することの証でもある。また、「大学や後輩の支援に参加できる喜びややりがいがある」（信州大学）、「相手から感謝されると嬉しいし、自信につながる」（追手門学院大学）というコメントからも明らかなように、教職員から認められている実感と他者の役に立てた経験が、チューターの自己肯定感を高めていく。まさしくチューターにとって、「この仕事はいいことづくめ」（大分大学）なのだ。

一方、学部生によるチュータリングの質には課題もある。学部生は大学院生に比べて実作経験が少ないため、「指導が不十分になりがち」（共愛学園前橋国際大学）、「相談内容が多岐にわたるので対応しきれない」（大分大学）、「自分のアドバイスに自信が持てない」（信州大学）のである。そのため、研修の積み重ねによるスキルアップは不可欠だが、ここに学部生特有の、あるいは大学固有の事情が絡んでくる。学部生は大学院生に比べて時間割に余裕がなく、研修のためのまとまった時間がとりづらい。一人前のチューターになるには時間がかかる上、育った途端に就職活動や学外実習、卒論制作などで思うように勤務に入れないジレンマがある。また、チューター育成のために一部の教職員のみで過度な負担がかかったり、様々な事情から学部生のチュータリングを監督指導する組織的な態勢／体制が整わなかったりする場合もある。学部生チューターの育成には、大きなメリットと可能性がある反面、解決すべき課題もまた多い。

6. 効果的な学部生活用のために一本学の場合—

ではどうすればよいのか。必要なのは、学部生起用のメリットを生かしつつデメリットを最小限にとどめる工夫だ。ここでは他大学から得た知見を、本学の実情に照らして3点挙げておきたい。

第1に、早く現場に投入して長く活躍できる「しくみ」を整えることだ。これはスキルの熟達を待たずに現場に出すという意味ではない。新人チューターは担当科目を限定する、チュータリングの一部分のみを担当するなど、段階的なデビューのあり方があってもよい。

第2に、まとまった時間が取りにくい学部生でも参画しやすい研修プログラムを整えることだ。細切れの時間でも取り組みやすい研修メニューを独自に開発する必要がある。

第3に、チューター同士が学び合う環境を整えることだ。教員主導による研修と、チューター主導による実践知共有の場とを有機的に組み合わせることで、チューターに成長の実感をうながすこともでき、なおかつ研修を担う教員の過度な負担も軽減できるだろう。

学部生を活用したライティング支援施設の運営は途に就いたばかりで、各大学の実践知の発信とその共有は今後さらに求められる。上の取り組みの成果も、稿を改め

て報告したい。

注

- 1 以下、単に「ライティング」とし、「日本語によるライティング」を指すものとする。
- 2 開設の経緯については、永井聖剛ほか（「『対話』を重視する「全学的ライティング支援」の実践的研究」成果報告『愛知淑徳大学論集 メディアプロデュース学部篇』6、2016）を参照。
- 3 ライティング支援者の呼称としては一般的に「チューター」が多く用いられるため、本稿では「チューター」に統一して用いる。
- 4 佐渡島紗織「大学における「書くこと」の支援—早稲田大学国際教養学部における「ライティング・センター」の発足」（『全国大学国語教育学会発表要旨集』109、2005）。
- 5 ライティング支援施設に関する報告には、吉田弘子他（「大学ライティングセンターに関する考察—その役割と目的」『大阪経大論集』61(3)、2010）等がある。注2に挙げた永井ほか（2016）においてもライティング支援を推進しているモデル校3校の概要が述べられている。
- 6 本稿で取り上げた4校のほか、名桜大学、立命館アジア太平洋大学がある。各大学が発表している論文やホームページ等で確認した情報である。
- 7 以上の3章の記述は、永井ほか（2016）pp.15-17を参照しまとめた。永井ほか（2016）では、利用者増の経緯などについても言及されている。
- 8 最新のWSD運営状況は、本誌「平成30年度「ライティングサポートデスク（WSD）」活動報告」pp.25-29を参照されたい。
- 9 信州大学では支援者を「ライティングアドバイザー」と称しているが、ここでは「チューター」に統一する。
- 10 加藤善子ほか「信州大学における学習／学修支援」（信州大学高等教育センター主催『シンポジウム「学生に届く学習支援」』、2018年10月19日）。
- 11 本学における研修の内容については、別の機会に詳しく報告したい。2017年度前期末の研修については、増地ひとみ（「ライティングサポートデスクにおけるチューター研修の実践報告—他者との対話と共有による意識の変化に着目して」『愛知淑徳大学初年次教育研究年報』3、2018）を参照。

付記

本稿は、平成30年度愛知淑徳大学研究助成「学部生ライティング支援者採用・育成方法のデザインと実践」（共同研究：研究課題番号18KD06、研究代表者 外山敦子）による成果の一部である。

執筆分担：増地(1~3、41、43、44)、外山(42、45、5~6)